# 令和五年度　推薦入学試験問題　小論文

浜松市立看護専門学校

次のA、Bは、共に朝日新聞朝刊（2022年7月21日付け）に掲載された文章である。よく読んで、以下の問いに答えよ。

A

「参政権なんかもたせるから、歯止めがなくなってしまっていけませんなあ」とは、1984年に経団連の稲山嘉寛会長が発した言葉だそうだ（赤松良子著「均等法をつくる」）。これが、男女雇用機会均等法の草案を示されたときの財界トップの感想なのである。当時の女性差別の根深さを語るエピソードだ。

85年に成立した均等法によって、女性の定年だけを若く設定したり、結婚した女性を退職させたりといった差別は違法となった。それでも、差別的な雇用慣行は続いた。採用や昇進での女性差別は、97年の均等法改正でようやく禁止される。今でも上場企業の役員に約8％しか女性がいないのも当然だろう。

先日の参院選で当選した女性候補は過去最多だったというが、政治分野の男女格差も依然として[a]惨憺[a]たるものだ。衆参両院の国会議員に占める女性は約15％にすぎず、列国議会同盟のデータで計算すると185カ国中、145位だ。

「男女平等を阻む『歯止め』」は、社会の至る所に今も残る。

生まれつきの男女の違いではなく、社会的に作られる性差＝［　①　］は、経済学では意思決定の問題としても盛んに研究されている。経済的意思決定に様々な性差が観察され、それが女性の社会進出を阻む要素にもなっているからだ。

たとえば実験経済学の研究では、男性が自分の能力を過剰評価し、能力に見合わない[b]ムボウ[b]な競争を好む一方で、女性は能力があるのに競争を避け、チャンスを見送る傾向が観察される。したがって、昇進が能力や適性の評価だけでなく、ライバルに打ち勝つような競争的要素を含む場合、女性の昇進は遅れてしまう。

選挙戦も[c]熾烈[c]な競争だ。その競争が激しすぎるせいで、優れた資質をもつ女性が立候補をためらっているとしたら、社会の損失でもある。一定割合の女性候補を擁立する「クオータ制」は、こうした観点からも正当化されうる。

経済学は、人は自分にとって最適なものを自発的に選ぶと想定する。すると、女性の立候補が少ないといっても、それは女性の自発的選択の結果にすぎないので問題はないことになる。これについては、ハーバード大学の経済学者、故デューゼンベリー教授の言葉をひきたい。彼は「経済学は、人々がなにをどのように選択するかを分析し、社会学は人々がなぜその選択肢しかもっていないかを分析する」と見事に述べた。

私たちは、生まれ育った環境に即して、「身の[d]丈[d]にあった」ものを知らず知らずに選んでしまう。経済学はこうした背景を無視しがちな一方、社会学はそこに全てを見いだそうとするという。保守的なジェンダー規範が強く残る場面では、意識せずにその規範に沿って行動してしまうこともあろう。それを女性の自発的選択と切り捨ててよいわけはない。

女性が競争を避ける傾向は、競争相手が男性であるときに顕著に観察されている。一方、世界的に珍しい女性優位社会で行われた実験では、性差は逆転し、男性のほうが競争を避ける傾向が強かった。これらは、意思決定の性差が、社会的に規定されることを[e]示[e]している。

また、女性が昇進しにくい理由のひとつに、評価に結びつかない組織内の雑用を押しつけられがちなことがある。この傾向を再現した単純な実験がある。時間内にグループの誰かがボタンを押せば、押した本人は1・25[f]ル[f]、他のメンバーは2[f]ル[f]もらえるが、時間切れになれば全員1[f]ル[f]しかもらえないゲームをするのだ。

多くの場合、時間切れ直前に誰かがボタンを押してくれる。ここでも性差があり、女性がボタンを押す頻度は男性の1・5倍だった。この性差も、グループが男女混合であるときにのみ観察されており、面倒見のよい女性にタダ乗りする男性側の問題もあぶり出されている。

男女格差の是正は[g]喫緊[g]の課題であり、女性登用を推進する制度が、これからも多くの組織で導入されるだろう。ただ、人を男女に二分すること自体が、性別の枠に当てはまらないノンバイナリーの存在を無視していることに注意が必要だ。

また、国会議員が男ばかりで問題だというならば、受刑者が男ばかりであることもジェンダー問題のはずだ。刑務所などに収容されている約3万8千人の受刑者は、9割以上が男性だ。性差別によって生じた結果ではないとはいえ、「社会的に作られる性差」が全く無関係とも言い切れないはずだ。また、自殺者の約7割は男性で、ここにも男女格差がある。「女性活躍推進」のためだけでなく、様々な問題でジェンダーギャップを論ずることも必要だ。

男女格差は、女性差別という過去の人権侵害の負の遺産だ。差別に加担した旧世代のほとんどは逃げ去り、その遺産を清算するのは現役世代の役割となった。特に、過去の差別の理不尽さを知らない若い世代の理解と協力が不可欠だ。そのためにも財界や政界、そして学界は、今さら都合よく女性活躍推進をうたうのではなく、過去の差別を明確に謝罪し、若い世代に頭を下げて、負の遺産の清算をお願いすべきであろう。

（竹内　幹「経済季評」（女性に「負」を選ばせてきた社会）筆者は経済学者　男性　48歳）

B

結婚しなくても女一人で生きていける時代になったとはいえ、依然として男女の経済格差は存在し、出世の道も男性ほどには開かれていない。食ってはいけてもカツカツで、非正規雇用の独身女性の半数が貧困状態に置かれている状況だ。

「金目当て」の女を悪しざまに罵る風潮があるが、そもそもその昔から女にとって結婚は金目当てでするものだった。シンデレラも紫の上も金目当てでないとは言い切れない。現代においても、ロマンティックな理由のみで結婚できる女性がどれだけいるだろう（『「金目当て」の男と結婚できる女はさらに限られるはずだ』）。

今年の春に日本公開されたジェニファー・ロペス主演の映画「マリー・ミー」は、ポップスターの女性と数学教師の男性との恋を描いたロマンティックコメディである。金にものをいわせることにためらいのない主人公がとにかく痛快で、純粋にロマンティックな関係を楽しむためには、双方が経済的にも精神的にも自立していることがなにより重要なのだなと気づかされる。ここまでしなくちゃだめなのかよ！　と思う半面、よくぞやってくれました！　と[h]快哉[h]を叫びたくもなった。

恋愛ものが成立しにくくなったといわれる近年、男と男、女と女の物語がさかんに作られようになったのは[i]カンゲイ[i]すべきことだが、『男と女に夢を見られるような物語も私は見たい。』

（「吉川トリコのダイヤモンドの味」（ロマンティックの条件）筆者は小説家　女性　44歳）

問一　波線部a「惨憺」、b「ムボウ」、c「熾烈」、d「丈」、e「シサ」、f「喫緊」、g「快哉」、h「カンゲイ」の、漢字は読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直せ。

問二　傍線部1「男女平等を阻む『歯止め』」とは、ここでは何のことか、本文中から抜き出して答えよ。

問三　空欄［　①　］に入る語として、最も適当なものを次の選択肢から選び、記号で答えよ。

（ア）セックス　（イ）ギャップ　（ウ）ジェンダー　（エ）ディファレンス　（オ）バイアス

問四　傍線部2『クオータ制』は、こうした観点からも正当化されうる。」とあるが、なぜそのように言えるのか、「クオータ制」に反対する意見もふまえて述べよ。（「女性候補者が少ないのは、～だから。」という形で答えること。）

問五　Aの記事に小見出しを付けたい。空欄②、③に入れるのに適当な語を、本文中から抜き出して答えよ（②は漢字四文字、③は漢字二文字）。

［　②　］より［　③　］清算が先

問六　傍線部3『「金目当て」』の男と結婚できる女はさらに限られるはずだ。」とあるが、筆者によればそれはなぜか、30字以上40字以内で簡潔に答えよ。

問七　傍線部4「男と女に夢を見られるような物語も私は見たい。」とあるが、筆者はどのような社会の到来を夢見ているというのか、本文をふまえて簡潔に答えよ。

問八　A、Bの文章を読んでの意見・感想を、将来看護の仕事に従事する者としての思い、考えを中心に、四五〇字以上五〇〇字以内で記せ。

※解答は縦書きで書くこと。改行、段落分けは行わなくてよい。

朝日新聞20220721掲載　朝日新聞社に無断で転載することを禁じる　承諾番号23－1980